2019年4月14日

中原キリスト教会

　　　　　　　　　　　**「エルサレムの見張り人」**

聖書箇所：エゼキエル33:1-11

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はエゼキエル書の33章から学びます。エゼキエルはエレミヤよりちょっとあとの預言者です。エレミヤ書はユダ王国の滅亡預言と将来におけるイスラエル救いの希望が述べられていました。その形態は散文または詩文にて書かれていました。これに対し、エゼキエル書はエレミヤの扱った時代より若干後の歴史の下でイスラエルのみならずすべての民族への主なる神の裁きと将来のエルサレム・イスラエルの回復について述べています。その表現形式は所謂黙示という形式です。黙示と言うのは幻想的な夢の舞台の叙述を通して終わりの日の状況を民に知らせるものです。黙示の先駆けとなるものはエレミヤ書に既に現れていますが本格的な展開はエゼキエル書です。こののち、ダニエル書7章以降が黙示の伝統に立っての叙述になります。この黙示は旧約偽典のエノク書、エズラ書、クムラン文書、バルク黙示録、エスドラの黙示録、ソポニアの黙示録などに受け継がれていくと共に、ダニエル書における終末の黙示は新約聖書黙示録に受け継がれていきます。同時期に各種黙示が書かれました。新約外典といいます。パウロの黙示録、ペテロの黙示録、セドラクの黙示録、外典ヨハネ黙示録があります。具体的世界の現象と対応関係を定めるのは非常に困難です。預言者が主なる神により与えられた幻視ですからあまり具体的歴史事実と繋げるとそのメッセージの範囲をあまりに狭くしてしまう危険があります。黙示は時代を超越した普遍的メッセージを我らに与えている、と考えるべきだからです。他方で、黙示における登場人物、動物を空想的存在や将来の世界の歴史と繋げて考えて、荒唐無稽な推理小説を組み立てる者もいます。例えばエゼキエル書1章に登場する動物を宇宙船になぞらえ、エゼキエル書は宇宙人の地球来訪を叙述したものと解釈するなどがその代表です。果ては、イスラエルの信仰やキリスト教は「主なる神」と表現される宇宙人の命令に従うことを説く宗教だ、という説にまで到ります。どの宗教でも神秘主義という潮流があり、ある意味では信仰覚醒運動を担う積極的側面もあります。しかし、イスラエルの伝統は「神秘」というのは「神の顕現」、「神の力の現れ」、を意味するのであって、呪術や、巫女の世界のような人間による不可思議な現象を指しているものではありません。イスラエルの信仰的伝統は人間はあくまでこの世の世界で生きること、これを超える事柄は超越的存在である「主なる神」の御業である、という考え方です。この両者の仲保者は極めて例外的にしか認められません。不可思議な事柄を仲保者のなす業として見て、その仲保者を崇拝するのは偶像礼拝と見做されます。黙示文学はイスラエルの伝統的信仰から見た時、ある種、あやうい存在です。私たちも、黙示の理解において、短絡的態度で解釈するのは危険であることを肝に銘じておくべきです。まずは私たち個人の信仰のレベルで解釈し、主のおっしゃられることと明白に対応している、という部分に限って社会的倫理的解釈を行うべきものと思います。

　エゼキエル書1:1では「第三十年の第四の月の五日、私がケバル川のほとりで、捕囚の民とともにいたとき、天が開け、私は神々しい幻を見た」といわれています。エゼキエルが幻を見て、語ったのはバビロンの地であったというのは異論のないところです。ダニエルの1-6章と同じです。エゼキエルはエホヤキンが新バビロニアによって捕虜となり、バビロンに連れて行かれた第一回バビロン捕囚の時、一緒にバビロンに連れて行かれた人々のなかに彼も居た、と推測されています。ユダ王国の滅びが始まった段階です。第三十年の解釈は諸説がありますが、ヨシヤ王の申命記改革から30年またはエゼキエルの年齢30歳というのが説得性のある説のようです。BC597年、第一回バビロン捕囚の年です。エゼキエルは祭司でしたから年代を数えるのにヨシヤ王の申命記改革を出発点に置くのもあながち変な解釈ではありません。「エゼキエル」の名前は「神が強くされる」の意味でエゼキエルの時代背景を考えると意味のある名前です。ゲバル川とはユーフラテス川の支流でバビロンを流れていた川です。3:15に「テル・アビブ」という地名がでてきますが、同一の場所と推定されています。考古学的発掘によってその地に捕囚の民が集団生活していたことが明らかになっています。いまのテル・アビブはここから名前を取ったのだと思います。イスラエル最大の都市です。1章から3章までは預言者エゼキエルの預言者としての召命に係る記事です。

2:1に「人の子よ」との表現がでてきます。「人の子」というのは原語では「アダムの子」です。新約聖書で端的に言えば救い主のことを指して使われる重大なことばです。新約では「人の子」の意味合いが多様であり、「預言者」の意味や「祭司」の意味や「王」の意味でも用いられています。一言で言えば「メシア」です。旧約聖書でも「人の子」は多数使われています。旧約の「人の子」は私が調べた限りでは、他の言葉で置き換えるとすれば「主の民」という言葉が適当です。「主なる神に従う僕」ということです。この言葉が神秘的な存在を指すように変わって行くのはダニエル書とそれ以降の黙示文学においてです。イエス様は「人の子」を「神の使者」「神の子」「預言者」のような意味で使われており、ほとんど神秘的意味合いはありませんが、弟子たちにとっては主イエスこそがメシアであり「人の子」ですので「人の子」が崇拝対象になりました。しかし新約聖書における「人の子」の用法は黙示文学における神秘性を帯びた「人の子」と、「神の使者」というような神そのものではない「力ある者」の伝統が入り混じっている、と見るべきものと考えられます。エゼキエル書における「人の子」はエゼキエルに対する呼びかけの言葉であり、神秘性はありません。「祭司である預言者エゼキエルよ」という意味です。このようなよびかけのことばとして「人の子」が使用されているのはダニエル書8:17に一回だけ使用されていますが、これ以外はすべてエゼキエル書です。逆にエゼキエル書ではこの呼びかけの言葉としての「人の子」以外の用法はありません。「人の子」自身はそもそもは「無垢な罪に堕ちる前の本来の人」の意味でしょうが、歴史の中でいろいろなイメージを付着させていきました。エゼキエル書は「祭司である預言者」というイメージを「人の子」に付与したのだ、と考えられます。

もう一点申し上げます。エゼキエル書とダニエル書の連続性です。エゼキエル書1章には４つの動物が出てきます。1:10では「彼らの顔かたちは、人間の顔であり、四つとも、右側に獅子の顔があり、四つとも、左側に牛の顔があり、四つとも、うしろに鷲の顔があった」と言われています。10:14でも4つの顔が述べられています。どうも4つの動物でこの世の事象を説明するのは当時のオリエント社会の一般的傾向であったようです。ダニエル書2章にも４つの動物が出てきます。この動物は当時及び来る未来の世界帝国のことです。エゼキエルの叙述からヒントを得て幻を見た、といえるでしょう。もうひとつ両文書の連続性で無視できないのはエゼキエル書1:26にある「人間の姿に似たもの」という表現です。直訳では「アダムの姿の者」です。さまざまな研究でこの表現はダニエル書7：13の「人の子のような方」の源流の言葉であろうと言われています。この「人の子のような方」がイエス・キリストの予型、でああると解釈されています。黙示録1:13にも「人の子のような方」がでてきます。これは再来のイエスです。旧約のなかで培われた「人の子」の用法が新約に流れており、主イエスの再来（マラナタ）によって新約が完結する、という流れになります。

4章から32章まではイスラエル及び他の近隣諸民族への裁きの預言です。申し上げたいことも多々ありますが、33章に飛びます。33章の最初の部分はまず1-9までがエゼキエル自身の信仰的態度の問題です。少々回りくどい表現がされておりますので、もう一度ゆっくり読みます。33:2-9です。「「人の子よ。あなたの民の者たちに告げて言え。わたしが一つの国に剣を送るとき、その国の民は彼らの中からひとりを選び、自分たちの見張り人とする。/剣がその国に来るのを見たなら、彼は角笛を吹き鳴らし、民に警告を与えなければならない。/だれかが、角笛の音を聞いても警告を受けないなら、剣が来て、その者を打ち取るとき、その血の責任はその者の頭上に帰する。/角笛の音を聞きながら、警告を受けなければ、その血の責任は彼自身に帰する。しかし、警告を受けていれば、彼は自分のいのちを救う。/しかし、見張り人が、剣の来るのを見ながら角笛を吹き鳴らさず、そのため民が警告を受けないとき、剣が来て、彼らの中のひとりを打ち取れば、その者は自分の咎のために打ち取られ、わたしはその血の責任を見張り人に問う。/人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。/わたしが悪者に、『悪者よ。あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もし、あなたがその悪者にその道から離れるように語って警告しないなら、その悪者は自分の咎のために死ぬ。そしてわたしは彼の血の責任をあなたに問う。/あなたが、悪者にその道から立ち返るよう警告しても、彼がその道から立ち返らないなら、彼は自分の咎のために死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる」とあります。要するに主はエゼキエルに対し「見張り人」となれと言います。見張り人が警告すべき時に警告しなければ、主は「その血の責任を見張り人に問う」と言っています。悪者であっても警告をあたえなければ、同じように「血の責任を問う」と言っています。警告しても改めないのであれば「あなたは自分の命を救うことになる」と言われています。エゼキエル即ちイスラエルの祭司であり預言者に対する大変な責任です。この「見張り人」という言葉は実は既に3:17で出ています。3:17-21はこの33:2-9とほぼ同様の意味のことを言っています。3:21は「しかし、もしあなたが正しい人に罪を犯さないように警告を与えて、彼が罪を犯さないようになれば、彼は警告を受けたのであるから、彼は生きながらえ、あなたも自分のいのちを救うことになる。」 と言っています。3:21では正しい者について警告をして罪を犯さないようになればあなたエゼキエルもいのちが救われる、と言っていますが33:9では、悪者に警告しても立ち返らなければあなたエゼキエルは義務を果たしたので免責される、と言っています。正しい人に焦点をおくか、悪人の焦点を置くかの差です。この脈絡のなかでイエス様のおっしゃったことを考えてみましょう。「汝の敵を愛せ」のことばをそのまま受け取ると、イエス様は33:9を読み替え「主が悪者に、『悪者よ。あなたは必ず死ぬ』と言うとき、もし、私がその悪者にその道から離れるように語って警告しないなら、その悪者は自分の咎のために死ぬ。そして主は彼の血の責任を私に問う。/わたしが、悪者にその道から立ち返るよう警告しても、彼がその道から立ち返らないなら、彼は自分の咎のために死ななければならない。そして、私は自分のいのちを救うことができない」ということになるでしょう。十字架による贖罪の救いは「悪人」にも及んでいます。エゼキエル書と主イエスの言動との間には基本的な差があります。私たちは新約の民ですから、悪い者に警告しても改まらない場合も私たちの責任はのがれることはできません。日本国家に警告を発しても改まらない場合でも私たちの責任は残ります。

この「見張り人」という言い方は戦責告白に使われている言葉です。戦責告白とは過ぐるアジア太平洋戦争についてキリスト者として採るべき態度を採らなかったとして、その責任を告白するものです。悔い改めの告白です。日本基督教団の戦責告白のうちこの「見張り人」の箇所をお読みします。「まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります」とあります。日本のキリスト者は「見張り人」の役割を果たさなかった、ということを悔い改める、という内容です。同盟教団の戦後70年宣言でも「ここに私たちは、国家に対して「見張り人」として立てられたことを自覚し、主に代わって国家に警告を与えることによって、神の国の拡大のために、私たちに与えられた宣教の使命を果たして行くことを表明します」とあります。この告白・宣言には疑問があります。日本基督教団の場合、戦責告白に言う「見張り人」の役割を果たさなかった、と言う程度のことではなく、積極的に戦争協力しています。1944年の日本基督教団統理富田満の植民地クリスチャンへの声明をみると、大東亜共栄圏を讃え、天皇制としての国体を守り発展を願い、欧米諸国のアジア人蔑視と戦い植民地解放を果さねばならない、と呼びかけています。右翼国粋主義と全く変わりありません。戦争は罪の塊だ、というキリスト者の根本認識がありません。また日本民族をアジア解放のリーダーとする高慢の罪についての悔い改めがありません。そもそも「見張り人」になるためにはキリスト者としての信仰基準がしっかりして居なければなりません。「見張り人」となれるかどうか以前の問題が解決されていません。同盟教団の宣言の方は過去の問題の悔い改めが不明確です。悔いてどう改めるのでしょうか。同盟教団の大勢は「非武装中立」の憲法9条理念を守るべき、と言う点で一致しているのではないか、とは思いますが、親しい関係にあるアメリカの福音派は民主主義を世界に伝播するのに武力行使が必要な時がある、という考えを支持していますし、アメリカ的民主主義の押しつけを世界中のあちこちで行っている米軍を支持しています。パレスチナの民にあれだけひどいことを行っているイスラエルをあたかも聖書で言うイスラエル復活の先駆けのように言うのも唖然とします。イエス様のおっしゃられたことをどう解釈してもこのようなことを正当化できません。アメリカのキリスト教は戦争と平和の問題では狂っています。アメリカの神学者の多くもそう言っています。日本基督教団について言えば根本的悔い改めが全教会で行われなかったため、今回の安全保障法案を推進するようなクリスチャンが現れるのです。「見張る」という限りは神様の日本国民に課しているミッションを知らねばなりませんが、そこが曖昧では「見張り人」にはなれません。

10-16節は共同体としてのイスラエルについて語っています。11節をお読みします。「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。－－神である主の御告げ－－わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか」 とあります。「主なる神」は「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ」とおっしゃられます。伝統的な「善人は祝福され、悪人は滅びが与えられる」という考え方とは異なります。イエス様の福音のメッセージに近似してきています。最初に「誓って言う」という表現がありますが主なり神が誓っておっしゃられるのですから、確実な希望ということです。「悔い改める」のヘブル語には2つの言葉があります。一つは「na-ham」という言葉で「悔いる」という意味合いが強い言葉です。もう一つは「shu:b」という動詞で「立ち返る」というのが本来の意味です。このうち、33章で使用されている「悔い改め」はすべて「shu:b」であり神に立ち帰れの意味です。11節の「立ち返れ」も当然「shu:b」です。この1節に3回「shu:b」が出てきます。またこの段落の最後の14-16節をお読みします。「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行い、/その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない。/ 彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行った彼は必ず生きる」とあります。11節と基本的には同じことを言っているのですが、更に新約のメッセージに近づいているように思われます。

13節をご覧ください。「わたしが正しい人に、『あなたは必ず生きる』と言っても、もし彼が自分の正しさに拠り頼み、不正をするなら、彼の正しい行いは何一つ覚えられず、彼は自分の行った不正によって死ななければならない」とあります。これは正しき人、即ち律法を守っている人が、それを誇りとし、自分の正しさに拠り頼み、不正をする、即ち神の正義に悖ることを行うなら、その正しい事も一切神に覚えられることはなく、滅びに到る、ということが言われています。ここでの不正は神の正義に悖ることですが、神の正義は弱き者を助けることですから、それをしなかった、ということです。いくら律法をきちっと守っていても、このような神の正義に悖ることは必ずあるでしょう。そうすると、一般に正しい者とされている者でも、高慢になったら、滅びに定められる、ということになります。これは新約聖書が述べていることと同じです。すべての良きことは自分の誇りとするのではなく神の栄光の表現とすべきだということです。

先程の悪者に関することと類似した叙述が14-16節に出てきます。「わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行い。/その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない。/彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行った彼は必ず生きる」となっています。ここで再び「悔い改め」が出てきます。この「罪を悔い改め」と訳された部分を直訳しますと、「罪から立ち返り」です。動詞は当然「shu:b」です。この世は罪の現実そのものだと言っても良いかもしれませんが、そこから神の義に立ち帰る、ということです。新改訳で「公義と正義」と訳されているのは口語訳では「公道と正義」、文語訳では「公道と公義」です。新共同訳は「正義と恵み」、フランシスコ会訳は「定めと義」となっています。ヘブル語は「mishpa:t」と「tsedaka:」ですから、文字通りには、裁きにおける正義と責めのない正義ということです。直訳からみるとフランシスコ会訳の「定めと義」がもっとも忠実な訳のように思います。前者が神がこの世にあてた定め、後者が神の義、というわけです。注目に値するのは新共同訳です「正義と恵み」となっています。「tsedaka:」を「恵み」と訳しています。言葉の訳としてはかなり無理すじの訳です。しかし、ここでこの悪者が具体的になすことについて述べられているところをみるとありえない訳ではありません。「その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩む」ことと言われています。不正をせず、とは神の義を意味しますから要するに弱き者を助けることです。いのちのおきては「イスラエルが生き続けるための掟」ですから要するにイスラエルは助け合え、ということです。すると、このような行為は神の恵みを行動で示していることと言えます。従って「tsedaka:」を「恵み」と訳すことも誤りではなくかえってその真の意味を示している、と言えます。18章にはこの言葉の具体的意味が更に述べられています。そして最後に「彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行った彼は必ず生きる」とあります。この悪人が行った悪は神に覚えられることがなく、彼が為した「正義と恵み」の業のみが覚えられ永遠の命を得る、と言っているのです。この悪者と言われている者こそ我々です。悪事が無視され善事のみが覚えられる、というのです。私たちは、それが主イエスの十字架上の犠牲の死によって齎せられたことを知っています。しかし、エゼキエル書の時は主イエスはおられません。エゼキエルの黙示のなかで結論だけが希望の形で示されたと言えます。エゼキエルもどうしてそのようなことが「悪人」に起きるのかは知らないのです。しかし、そのような幻を見させられたのです。ここまでくると、エゼキエル書の悪人についての叙述は新約の福音そのものと言っても良いと思います。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日のひとときを感謝申し上げます。エゼキエルへの主の御言葉を通して、「悔い改める悪人の罪は何一つ覚えられない」との福音のメッセージを頂きました。これは主イエスにより贖われた私たちを指しています。そして、神の国の国籍を与えられました。すぐる戦争の歴史を振り返り、日本民族の大きな罪を真に悔い改める者とさせて下さい。主が期待されているような「見張り人」になれるとは全く思いませんがせめて神の国の証人（あかしびと）として、「見張り人」に聞く耳を持たせてください。その勇気をお与えください。主イエスのみ名により祈ります。アーメン）